

2025年度 研究成果報告書

所属機関名	琉球大学
申請者氏名	香山 太輝
研究課題名	地域学校協働における子どもと大人の相互成長-戦前期上灘小学校を中心に-

【研究の概要】

学校と地域とが協働体制を構築していくことは、子どもたちの育ちを支える文脈だけでなく、学校に関わることを通した大人の学びを実現すること、すなわち社会教育や生涯教育の文脈からも求められている。こうした課題状況に応答すべく、本研究では、戦前期郷土教育運動において指導的役割を果たした鳥取県の上灘小学校に注目した。同校では、地域の農会と経営結合を図り、農会長および農業技術員、地域の農民たちが学校運営に参加していたことや、校内に農場や工場を整備し、地域社会の中心として学校を機能させようとしていたことが指摘されている。しかしながら、従来は同校における活動の実態、とりわけ地域住民などの大人の学びの実態に関しては詳細な検討がなされてこなかった。そこで本研究では、上灘小学校において地域連携が進められていったプロセスを検討し、地域住民たちの参加状況やそこでの学びの実態を解明するための基礎作業として、上記のような実践を指導した峰地光重に関する史料の調査および収集に取り組んだ。とりわけ、峰地の教員としてのキャリアの初期段階の史料収集に取り組み、彼の思想形成過程の一端を明らかにした。

【研究の内容及び成果の詳細】

1. 研究内容及び成果（本研究によって得られた新知見、成果等）

本研究では、当初、以下2点の作業課題を設定していた。

①上灘小学校校長の峰地光重に関する史料を用い、彼の学校経営の理念や地域連携の意図を明らかにする。

②経営結合に関与したアクター（農会に加え、行政職員、青年団等）による学校への関与の状況や、彼らの学校や地域の実情に対する課題意識、学校と連携した活動の中での課題解決の過程、そしてそのプロセスの中で人々の「意識」がどのように変容していったかを明らかにする。

上記のような計画のもと、以下のような史料探索作業に取り組んだ。

上灘小学校において展開された地域学校連携の活動において指導的な役割を担った校長峰地光重に関する史料収集を行なった。彼のキャリアにおいては、鳥取県内だけでなく、東京都や岐阜県の学校でも教育実践経験があったことから、それぞれの県の図書館（倉吉市立図書館、鳥取県立図書館、国立国会図書館、東京都立図書館、岐阜大学図書館、岐阜県立図書館など）を訪問した。そこでは峰地が投稿した雑誌記事を中心に、関連史料を収集した。具体的には、『因伯教育』や『鳥取新報』、『因伯時報』などの鳥取県内の媒体に加え、全国規模の教育雑誌に投稿された峰地や上灘小学校に関連する記事を収集した。

上記のような峰地に関する史料収集によって示唆されたことは、彼の教員としてのキャリアの中でも初期の段階における教育研究活動や思想形成のプロセスに注目することの必要性である。ここでは、戦前期における彼のキャリアを、便宜上大きく以下のように整理したい。第1期：鳥取県師範学校を卒業し、鳥取県内の庄内尋常高等小学校、光徳尋常高等小学校、高麗尋常高等小学校、鳥取県師範学校附属小学校で勤務していた期間。第2期：上京し、池袋児童の村小学校で勤務していた期間。第3期：鳥取に帰郷し、上灘尋常高等小学校、東郷尋常高等小学校で勤務していた期間。地域学校連携に関わって、これまでの研究で注目されてきたのは、上記の区分のうち、峰地が郷土教育に取り組んだ第3期および、その実践の基盤となる思想が形成されたという第2期であった。本研究においても、計画段階においては、第3期に関わる史料発掘に取り組むことを予定していた。しかしながら、本研究における史料調査の結果、第1期において、学校で農場を経営し、農作業に従事する実践に取り組んでいたことが明らかになった。以上の成果より、助成期間中においては、計画段階における②よりも①に注力して取り組むこととし、具体的には以下のような成果が得られた。

峰地は、庄内尋常高等小学校の時期から学校の敷地内に農場を整備し、そこで教師と子どもと共に農作業に取り組むことを構想していた。その後、光徳尋常高等小学校では実際に農場を経営し、子どもと共に農作業に取り組むこととなる。峰地はこうした実践を、将来農業に従事することを念頭に置いた職業教育としてではなく、「人をつくるための農業科」として位置づけおり、注目すべきことに、この実践は単に子どものためだけでなく、教師の「生活に色彩と情調を添へ」、「修養の機会」をもたらすものであると認識していた。このように峰地は、上京前の第1期において既に、農作業に従事する実践を大人と子どもの双方が成長するための機会として捉える発想を有していたことが考えられる。

2. 今後の研究の見通し

ここまでの研究によって、峰地が、農場を経営し農作業に従事する実践を、大人と子ども双方の成長につなげようとする発想を有していたことが示唆されたが、このことを実証し、かつ、そこでの学びや成長をどのように捉えていたのか、また、大人と子ども双方の学びの関係性をどのように捉えていたのかを解明するためには、今後さらに以下のような点を検討していく必要がある。

まず、峰地による農場経営の実践の構想内容をより詳細に明らかにすることである。この実践の構想にあたって、彼はアメリカのインディアナ州にあったという「健全学校」と呼ばれる学校の情報を参照していた。峰地は雑誌『日本学校衛生』に北村文哉によって掲載された「米国の健全学校」という記事を参照していたと考えられるが、ダニエル・ブーンという人物によって設立されたと説明されているこの学校の詳細は不明である。そもそも、この学校がどのような学校であったのかを明らかにすると共に、この時期に峰地自身がどのような研究に取り組んでいたのかについてより詳細な検討が必要である。助成期間中の研究によって、第1期（1910年代～1920年代前半）に発表された雑誌記事入手しているが、これらの史料の分析を進めると同時に、今回の調査の過程で所蔵が確認された峰地の関連史料の収集と、さらなる史料調査・収集も進めていきたい。

次に、実際の農作業を通じた教育実践の内容を詳細に明らかにすることである。この点を検討する際に重要であると考えられるのが、体を動かして作業に取り組むことと並行して行われていた「経験録」の作成という取り組みである。峰地はこれを、子どもが自分自身の生活を省察し、「意義ある生活の基盤」とするものであるとしている。農作業においては、「児童をして自己の存在する環境に対して不断の研究」をさせる基盤ともなり、例えば、「作物の発育程度や発芽状況」などを記入させるものとしていた。この実践は、自ら生活を見つめ、それを綴る生活綴方の実践にも関連するものであったと推察される。峰地は、生活綴方の実践者としても知られているが、まだ綴方教育とさ名指されていない時期の萌芽的な試みが、農作業を通じた教育実践と関わって取り組まれていたことは注目に値する。さらに興味深いことに、峰地によればこの「経験録」は子どもだけでなく、教師も作成することが必要であり、彼自身も作成していたという。このことは、峰地が思い描いていた、教師（大人）と子どもの学びや成長の内実を考察する上で、農作業と「経験録」の作成とがどのように関連していたのかを検討することが有効であることを示唆している。したがって今後は、農作業の内容や教育実践上位置づけについて検討することと並行して、「経験録」の作成およびこれに続く綴方教育が農作業に取り組む実践にどのように関わっていたのかを検討していきたい。

3. 本年度の学会発表・論文、刊行物・著書名等（今後、発表等を予定しているものも含む。）

今後は、本研究を通して収集した史料の分析および整理をすすめ、その成果を以下のように発表していきたいと考えている。なお、本計画については、史料収集の状況等によって変更の可能性はある。

① 2027年3月末に教育実践史研究者が主催する研究会に参加し、峰地が学校で農場を経営することを通じた教育実践を構想し実践していくプロセスについてまとめ、口頭発表を行った上で論文化し、教育関係ジャーナルに投稿することを予定している。

② 2027年6月には日本カリキュラム学会第38回大会において、峰地による農場経営と「経験録」に関する実践をまとめ、口頭発表することを予定している。